

姫路的 “米百俵”

姫路城が無血開城したのは慶応4（1868）年のことでした。主がいなくなり、明治政府に接収されることになった城は、その広さゆえに陸軍の敷地となり、第二次大戦後軍が解体されると公共用地となりました。その中には病院や学校、警察署など、現代の私たちにとって必要不可欠な施設ばかりです。姫路城があったから、そこに公共施設ができたと言えるかもしれません。本号では、城郭内にあった公共施設の一つ姫路図書館※についてみてみることにします。

さて、「バブル崩壊」以後の長引く不況は、ここにきて回復基調にあるという報道が見られるようになりました。しかし、地方都市に住む身にとってはどこか外国の話のようです。回復どころか先行き不透明な不安感だけが日に日に増しているという感じがしています。こうした経済的変動が資本主義経済にはつきものであることは、中学生でも習って知っていることです。歴史の教科書には、現在の不況に匹敵するような経済的状況を近代以降、何度も経験していることを載せています。

明治末期、日本はロシアと戦争をしましたが（日露戦争）、日清戦争のように国益につながる利潤の獲得には到らず、かえって戦費調達のための国債償還などで緊縮財政を余儀なくされ、戦後恐慌を招きました。

この戦争で姫路に駐屯する第十師団は山東半島方面に出征しました。徴用された人々が続々と姫路に集まってきたので、まちは“軍都”として相当な賑わいだったとのこと。となると、戦後の反動が姫路にとって小さくなかったことは想像に難くありません。商工業関係に強い堀音吉が姫路市長になったのものの理解できます（『姫路市史』第5巻上）。その一方で当時の姫路市民の一部が、この難局に対応すべく起こした行動の一端を示す史料があります。

『陸軍省大日記』乙輯（M44-2～10）の中に「姫路城内陸軍省用地使用許可の件」という文書が収載されています。

承諾書

当神社ニ致借居候陸軍省御所轄地之内当市之有志ニ於テ設立ノ図書館敷地ニ要スル坪数ハ借居地坪之内ヨリ分割スルモ氏子タル市民之公益上ニ供スル事ニ付当神社ニ於テ差支無之候間此段承諾仕候也

明治四十四年十月廿日

県社射楯兵主神社

| | |
|------|-------|
| 社司 | 黒田素行 |
| 氏子総代 | 町田猛郎 |
| 岡 | 菊川惣吉 |
| 岡 | 大野房一 |
| 岡 | 本庄松次郎 |

射楯兵主神社（播磨国惣社）が陸軍に貸している敷地の一部を姫路市民有志が設立する図書館敷地として貸し出すことに異存はないと神社側が承諾しています。早速翌日付で第十師団経理部長宛に来月（11月）より30年間、年2円50銭で借用を願っています。願書を提出したのは「姫路図書館設立発起人総代」で（発起人は全127名で、堀音吉もそのうちの一人）、長沢敬三郎（元塩町25）、三宅正太郎（俵町8屋敷）、安平重雄（西紺屋町18）、岩谷栄太郎（景福寺前22屋敷）、関口存啓（本町62）が総代として名を連ねています。

史料によれば、図書館は惣社東側の一角に造られることになっており、「城踏」38号で

も紹介した陸軍の借居社とは惣社の参道を挟んで北東すぐの場所にあたります。建物の敷地は東西15間、南北15間の正方形でした。ちなみに、この文書には敷地図と図書館の間取図も添付され、惣社周辺の状況も少しわかります。この時はまだ、惣社門枳形は破壊されておらず、鳥居先門前の堀や橋も現存していたようです。図書館敷地は惣社境内とはいいながらも一応陸軍用地にもなっているもので、発起人たちは万一の場合には、即座に敷地を軍に返却するつもりであることも申し添えています。

ところで、127名からなる発起人たちが、この時期に図書館を設立しようとしたのはどうしてだったのでしょうか。第十師団への願書には「姫路図書館設立趣意書」の写しが添付されています。それによると、冒頭「近時社会ノ趨向ハ生存競争ノ度日一日ヨリ劇甚ヲ加ヘ優勝劣敗ノ跡愈々以テ顕著ナラントシ吾人大ニ覚悟ヲ要スルモノアリ」と始まります。日露戦争後の不況がもたらした社会の激変ぶりが察せられます。続いて次のように記しています。

斯ル時世ニ処シテ最後ノ勝利者タルベキ条件ハ一ニシテ足ラザルモ主トシテ智能ノ啓発・人格ノ修養ニ期待スベキハ一般ノ是認スル所ニシテ、之ガ収得ハ先ヅ指ヲ読書ニ属スルノ何人モ之ヲ否定スル能ハザルモノナルコトヲ信ズ。
 凡ソ殖産興業ノ振作国民福利ノ増進数ヘ未レバ前途実ニ多端ニシテ其ノ企画経営スベキモノ枚挙ニ遑アラザラントス、而カモ其治動ノ根本タル智徳ノ啓培ニ至リテハ夙ニ教育機関ノ設備アリト雖モ一般ニ之ガ利益ニ浴スルコトハ決シテ容易ノ業ニアラズ於是乎吾人ハ適切有益ナル知識ヲ広ク社会ニ供給シ併セテ高尚ナル人格ノ修養ヲ一般人士ニ推奨スベク、茲ニ図書館ノ建設ヲ絶叫スル所以ナリ。

趣意書なので多少力みや戦後という状況、発起人たちの立場を反映した文言も見られますが、こんな時代だからこそ「智能の啓発と人格の修養」が大事であり、そのためにはまず読書なのだとか強く宣言しています。本来、国富を増進させる産業拡大を下支えする「智徳」は教育機関がそれを「啓培」する役割を担うはずなのに、現実にはそうした機関や設備の恩恵を一般の人たちが享受していないことを指摘しています。そして、アメリカのカーネギーと宋の趙晋を例に挙げ、「其他読書ニ資リテ成功シタルモノ古今東西其ノ軌ヲ一ニス」とまで言い切り、だからこそ、一般の人たちが容易に有益な知識を獲得でき、かつ人格の修養に益する施設（知識と人格がセットになっているのがミソ）として図書館を設立するのだと「絶叫」する、というのです。この有志によって発願された図書館は、大正元（1912）年8月21日開館し、1ヶ月平均317人の閲覧者がありました（橋本政次『姫路市名所案内』精文堂、1913）。

昭和22（1947）年7月、姫路城三の丸の元兵舎に「姫路市立図書館」が設置されます。この図書館設置が姫路市の戦災復興に関わる第一番目の事業でした（生尾哲夫編『十五年史』姫路市立図書館、1962）。衣食住に困る市民がまだ多い中、図書館の事業が優先されたのです。庄静夫（元姫路市教育長）は「敗戦による経済的・政治的思想混迷の真只中に」図書館が設置されたことを「姫路市文教史上正に画期的事件」と高く評価しますが（生尾前掲書）、すでに姫路図書館発起人たちは明治から大正へという時期に、将来ことを考えて図書館設立に動いていたのです。

激変する世の中、お金がなくて苦しいときに、何のためにお金を使うか一参考になる歴史が姫路にもありました。



姫路図書館の写真
 （橋本『姫路市名所案内』所収）

※市立図書館とは系譜的に繋がらないようです（『姫路市の図書館』姫路市立城内図書館）

